生態系を守るために
野生生物と正しく接しよう

道ばたに咲くきれいな花や、川や水辺で見かける生きもの。その中には「外来種」と呼ばれる生きものもたくさんいて、生息地を広げないため取り扱いには注意が必要です。また、野生生物への餌やりが意図せず近隣住民の迷惑につながっていることもあります。野生生物との正しい付き合い方を考えてみましょう。

問☎712-6307自然環境課

外来種ってなんだろう

「外来種」は「外来生物」とも呼ばれ、明治時代以降に人の手によって海外から持ち込まれた動植物のこととされてきました。現在では国内であっても、本来の生息地とは別の場所へ持ち込まれた場合は、外来種と呼ばれています。

外来種は、在来種を食べたり、生息環境を奪ってしまったりして、生態系に悪影響を与えることがあります。

身近な外来種

アカミミガメ

通称ミドリガメ。ペットとして輸入されました。今ではあちこちの川や池で貴重な水草などを食べ荒らしています。

アメリカザリガニ

食用ガエルのエサとして持ち込まれました。食欲旺盛でヤゴ（トンボの幼虫）の天敵。

キショウブ

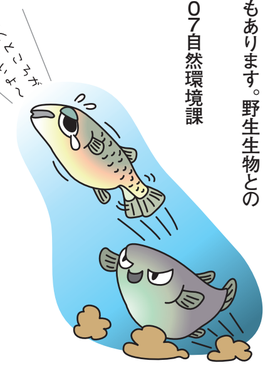
美しい黄色い花を咲かせ、花ショウブと似ていますが、他の水辺の植物を追い出しているやっかいもの。

オオキンケイギク

緑化や観賞用に持ち込まれました。一度植えると、他の野草を追い出し、自分たちだけが増えすぎてしまいます。

カダヤシ

ボウフラ駆除のため持ち込まれました。メダカを襲って追い出します。



外来生物と正しい付き合い方「入れない」・「捨てない」・「広げない」

すでに身近に見かけるようになった外来種でも、市内にはまだ生息していない場所があります。私たちや生きものの暮らしを守るために、3つの原則を守って外来種をこれ以上広げないようにしましょう。

入れない

別の場所から生きものを持ち込むのはやめましょう。外来種を持ち運んで別の場所へ放すと、そこにいた在来の生きものに大きな影響を与えます。また、市内であっても、むやみに生きものを別の場所へ移すのはやめましょう。

捨てない

外来種に限らず、一度飼い始めたら最後まで責任を持って飼いましょう。

ペットが大きくなり、飼いきれずに捨ててしまう事例が後を絶ちません。例えばアカミミガメも、捨てられたものがやがて大きくなり、川で水草を食べ荒らしています。

広げない

外来種を野外へ捨てたり、逃がしたりしないようにしましょう。

ペット以外でも、外来種を別の場所へ持ち運んで放してはいけません。

見つけたら特に注意

外来種も繁殖すると、生態系の中に組み込まれたり、数が増えすぎたりして、駆除が難しくなってしまいます。まずは、外来種の侵入を防ぐことが大切です。

アライグマ

かつては人気アニメのキャラクターにもなっていましたが、実際には成体になると凶暴で、飼いきれずに逃がされたことが野生化の始まりです。雑食性で、小動物から農作物まで何でも食べてしまうため、生態系や農業への被害が懸念されています。

市内にも出没

過去3年間で14頭のアライグマ（行徳地区11頭・八幡・大野・国分地区それぞれ1頭）が捕獲または目撃されています。

尾
尾に黒いシマがある

顔
耳の縁とヒゲが白い

見つけたら自然環境課へご連絡ください。

自然環境課では、アライグマが市に定着することを防ぐため、目撃場所近くに捕獲機材（箱わな）を設置し、捕獲・殺処分を行っています。箱わなの設置にご協力ください。簡単な方法で管理することができます。

ヒアリ

出典:環境省ホームページ（https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/list.html）

近年、注目されたのが南米原産の「ヒアリ」です。人体にとって危険なばかりか、生態系や農業への影響も懸念されている「特定外来生物」です。平成29年は国内で26件の発見事例がありましたが、市街地に定着した事例はなく、環境省は港湾等での水際対策に注力しています。

アリの巣駆除はちょっと待って

市内には、さまざまな種類の在来のアリが生息し、身近な昆虫として親しまれてきました。また、在来のアリは、ヒアリを攻撃し、ヒアリが広がるスピードを遅めてくれます。ヒアリを疑ってむやみに他のアリを殺すのはやめましょう。

疑わしいアリを見つけたら

もし、疑わしいアリを見つけた場合は、環境省のヒアリ相談ダイヤルに相談してください。

ヒアリ相談ダイヤル　☎0570・046・110

受付日時　土日祝日を含む毎日（年末年始を除く）午前9時〜午後5時

野生生物は　餌やりせず　そっと見守って

私たちの身近には、たくさんの野生生物が暮らしています。駅前や住宅地にハトやカラスなどの鳥が飛来し、川沿いではユリカモメなどの水鳥が餌を探しています。このような生きものたちへの過度な餌やりが、苦情やトラブルの原因となっています。

餌は自分で探す

野生生物は、自分たちの餌を採れる場所にやってきて、餌がなくなれば、また新たな場所に行きます。私たちが過度に餌やりをしなくても、自分たちで生きていくことができます。

近隣トラブルの原因にも

餌やりを始めると、その場所にだんだんと野生生物が集まってくるようになります。生きものの数が増えれば、餌やフンの量が増え、道路や建物が汚れ、近隣の方にとって迷惑となります。

一つの生きものが増えすぎる

生きものは、自然界のバランスの中で生きています。特定の生きものに餌を与え続けると、その生きものだけが増えていき、やがて他の生きものの餌が奪われたり、その場所から追い出されたりしてしまうなど、生態系のバランスを崩してしまいます。